「支えたい心」が、先にあった

先進の東北

senshin-no-TOHOKU

NPO法人「のんび～りすみちゃんの家」

幾多の過酷な歴史や自然の挑戦を受けてきた東北各地では、眼前の課題に挑む試みが数多くなされてきた。その試みには、日本社会が抱える課題解決のヒントがひそんでいる。

大切にされた「時間」

宮城県東松島市。東日本大震災により、市の65%が浸水し甚大な被害を受けた。その割合は、被災自治体の中で最も高い。

今は、駅舎もホームもなくなったJR仙石線東名駅。仙石線は、その東西数駅間、まだ復旧していない。現地復旧は不可能。はるか山側に新駅ができる。

東名地区、隣の野蒜地区を訪れた人は、津波以前の光景との落差に耳と目を疑うだろう。かつての住宅地は、葦が群生し、大きな池もある。まるで、海辺の低湿地だ。地盤が沈下し、津波が地面をえぐり、地形がまったく変わってしまった。震災前の590世帯（2010年6月統計）中、182人の命が失われた。

東名駅跡すぐ近くに、NPO法人「のんび～りすみちゃんの家」の施設「すみちゃんの家」がある。法人は高齢者デイサービスと宅老所などを運営する。理事長のすみちゃん、伊藤壽美子さんは、みやぎ宅老連絡会の代表を務めている。

宅老所を見学した、手芸をする人もいる、椅子に座り外の景色を見ている人もいる。一人一人の時間が、それぞれ大切にされ、ゆっくりと過ぎていく。だれがスタッフで、だれが利用者か、それすらあまり分からない。

震災で地形が変わり、かつての住宅地や田畑が「海辺の湿地」のように

自然に生まれた

「宅老所」とは、簡単にいうと、民家を改造し、デイサービスを提供し、またショートステイ（泊まり）や、本人と家族が望めば、「終の住み処」として生活も可能な施設ということになる。「認知症高齢者介護の切り札」などと高く評価されてもいる。

「宅老所」の特徴は、成り立ちに端的に表れている。

「高齢化」「独居老人」などの言葉が話題になった1980年代から90年代。全国各地で、自然発生的に近所の困っている高齢者の面倒を見ようという動きが始まった。最初は「託児所」の「託」が使われていたが、「自宅のような居場所」ということから、「宅」の字が使われるようになった。

伊藤さんもそうだ。

「近所に目の不自由なお年寄りがいて、ご夫婦2人暮らしの時は生活できていたんですが、奥さんが亡くなって、それが成り立たなくなった。そこで、支える居場所を作ろうと思ったわけです」

現在の制度で「ショートステイ」と呼ばれる「宿泊」も、自然に生まれた。

二十数年働いていた会社の慰安旅行に行ったことがないという婦人がいた。障がい者の夫を、一人にしておけなかったのだ。伊藤さんは「お父さん、うちで泊まったらいいよ。ゆっくりしておいで」と声を掛けた。

全国各地で、近隣の困っている人に合わせて、真心の経験が積み上がっていった。今では全国的に有名な「富山型」といわれる、高齢者だけでなく、障がい者や子ども居場所として利用できる施設もできてきた。伊藤さんのところでも、知的障がい、聴覚障がいなどの子どもたちの、居場所となり就労までつながった。すべてが自然だった。制度や名前は後からついてきた。

まず、「何とかしたい」という心があった。

東松島市東名の「すみちゃんの家」。一人一人の時間が大切にされ、ゆったりと流れていく

90年代後半、NPO法ができ、国の「グループホームモデル事業」も始まった。各地で積み重なってきた「宅老所の経験」を、国が制度として採り入れだしたのだ。また、大規模な「老人ホーム」の中でも、少人数のグループを作りケアをするという、「ユニットケア」の流れができてきたのも、宅老所の影響が大きい。

全国各地の宅老所がネットワークを作り、それぞれの「経験」を共有しだしたのはこのころである。みやぎ宅老連絡会は、そのネットワーク作りで先駆けの一つとなり、「宅老所・グループホーム全国ネットワーク」設立の中核となった。

豊かで多彩な「宅老所」の経験

伊藤 壽美子

NPO法人 みやぎ宅老連絡会代表

20年ほど前、「ものわすれ外来」（認知症の早期発見・早期対応を目的とした外来診療）で有名な山崎英樹医師が、「参考にしたい」と、うちに来られたんです。「ドクターは専門家でしょう。なぜ、うちに？」と尋ねると、「いや、認知症介護の専門家は宅老所にいる」と言うんです。その時、「宅老所」という言葉を知らないでやってたんですよ。笑い話みたいな話ですが、それが宅老所の本質かもしれませんね。

宅老所は、地域によって人によって、違うニーズに応じて生まれ、多彩なサービスを提供してきました。宅老所は生まれも、育ちもさまざま。形式の統一などどうでもいい。一人の人を大事にするという「宅老所の心」がすべてなんです。

それぞれの宅老所には、語り尽くせないほど思い出を残したおじいちゃん、おばあちゃんって必ずいるんです。その人生を語り継いでいこうと『宅老所物語』という本を作ろうとしていました。震災が起きて、取りあえず先に、震災の時の各宅老所の経験を残そうと、『「証言」～3・11宅老所の真実～』（パド・ウィメンズ・オフィス）という本を出版しました。

宅老所は、どんな人でも、どんな時でも、安心して帰れる、「もう一つのわが家」でした。

もう一度ここで！

2011年3月11日。伊藤さんは車で移動中に地震に遭遇した。「すみちゃんの家」に駆けつけて驚いた。連絡がつかないなかで、職員はすでに利用者避難の準備を整えていた。全員避難を見届けて、伊藤さんは、孫が避難している小学校に向かう。小学校は津波に襲われ、伊藤さんは孫を背負って、事務所の北側の県道の高いところに逃げ、辛うじて助かった。

なかなか水が引かず、地域に入れたのは3月末。待っていたのは、変わり果てた「すみちゃんの家」だった。まだ残る海水の中に、どこからか流されてきた家々が沈んでいた。

「再建は無理だと覚悟しました。でも、動けない利用者さまもいるなかで、全員が避難できた。一人一人に気を配る〝宅老所の心〟が、いざという時に発揮されたのだと思います」（伊藤さん）

職員や、日本中から来たたくさんのボランティアが、泥にまみれた「すみちゃんの家」をきれいにしてくれた。ありがたかった。地域への恩返しの思いもあり、近くの避難所に、毎週、温かいみそ汁を150食届け続けた。

ある日、伊藤さんが掃除をしていた時、たまたま利用者の家族が通りかかった。「ばあちゃんが、『すみちゃんの家』に行きたいよー、ってしょっちゅう言うんだー」

ここでもう一度、仕事をさせていただこう。生かされた命だから――。「一歩」が踏み出せた。

地域の一員

東日本大震災の時、「すみちゃんの家」で迅速な避難が可能だったのには、近隣の協力も大きい。普段から、地元の消防団の団長などが「かわりはねえか！」と、自然に出入りしている。どこの部屋にだれがいて、体の不自由度はどれほどかをよく知っている。近隣住民も、「ご近所さん」として普通に出入りしていて、震災の時も駆けつけてくれた。

地域で困った人の面倒を見ていくという、宅老所の「地域重視」の考え方が、しっかり根付き、地域からの支えを生み出したのだ。

2011年4月23日、全国ネットのニュース番組で伊藤さんは訴えた。

「津波をお年寄りたちの人生の最後のステージにしてはいけない」

復興の格差が拡大している。震災は、高齢者、障がい者など、困難を背負っている人たちに一層重くのしかかる。震災だけではない、いろいろな課題を抱えた人たちが、住み慣れた地域で、自分の人生を有意義に生きることの重要性を考えた時、「宅老所」の経験が多くの知恵を提供してくれるに違いない。